

『そしてわたしだけ残ってしまった』

Kan

栃木県の山奥に、底のまるで見えない切り立った谷がございました。そこには、頼りないロープの吊り橋がひとつ架かっており、その先の孤立した崖の上に一軒の山荘が建っていました。

その名を『湖月荘』と言います。

さて、そこには、六人の男女が合宿と称して、宿泊しておりました。

……というのは、わたしたちは、とある大学のミステリ研究会の会員だったのです。

柱時計の針がカチリカチリと音を立てています。

「空虚な音だ。せっかくお誂え向きの状態だというのに、ミステリらしい展開は何ひとつ起きない……」

「そうだな。人、ひとり殺されてしまえば面白いのに」

そんなことをみんなで語り合っていました。

その夜の事です。ひとりの女子生徒が包丁で刺されて殺害されました。その女子生徒は『渡邊瑠奈』という名前の一年生でした。殺された場所は湖月荘の台所です。その殺された時の体勢といったら、とびきり奇怪なもので、仰向けの状態で、両手の指先を頭部にくっつけるようにかかげていて、それはまるでM字の形、子どもがお猿さんの物真似をしているみたいなのでした。両足は正座をしたまま、後ろにぼったり倒れて、まるで膝を曲げるストレッチをしているみたいだったのであります。

おまけに、この女子生徒は『鍋の蓋』を、体の横に並べて出入口から見えないように隠していました。そこには彼女自身の血の手形がくつきりと残っていたのです。

この鍋の蓋は元々、台所の流しの下の棚にしまわれていたものです。

そして、台所の床はあたり一面、鮮血にまみれて足の踏み場もなかったのです。

「どうもこいつは奇っ怪な殺し方だ。しかし出血多量の失血死であることを考えると、被害者のこの不自然な寝姿も、鍋の蓋を体に隠しているのも、犯人の演出ではなくて、被害者自身のダイニング・メッセージなのだと分かる……」

と、探偵役の男子学生、吉野葛俊哉は言いました。

「何故だい。被害者の絶命後に、犯人が被害者をこの体勢に変えて、その上、鍋の蓋を死体の横に隠したのだとも考えられるじゃないか」

と、ワトソン役の児玉善次郎は反論します。

「それならば、床に拡がった鮮血に、犯人の足跡が少しでも残っているはずさ。それがまったくないってことは、犯人は包丁で刺した後、すぐにこの場から離れたということさ……」

「おお、なんと明快な推理」

得意げに推理を披露する、吉野葛探偵は、エラリー・クイーンのような顔をしています。

「そして犯人は君だね。鍋島君……」

吉野葛探偵は、振り返りながら爽やかに、立ち尽くしている二年生の鍋島元道を指差しました。

「僕が犯人だって……何故だい。吉野葛君……」

鍋島元道は、吉野葛の言葉に真っ青になって必死に問い返しました。

「なあに、簡単なダイニング・メッセージだよ。被害者渡邊瑠奈は、『鍋』の蓋を棚から取って死んでいたのだからね。それは鍋島の『鍋』を暗示しているのだね。そして被害者は、両腕と両脚の形で、ふたつの『M』の字を表している。『元道』は、一文字ずつがそれぞれ『M』で始まっている名前だよ。これはつまり、鍋島元道君。君の名前を如実に表している……」

「なに、そんな単純なダイニング・メッセージなわけないだろう！」

「いいや、君こそが真の犯人なのだよ。床がまんべんなく、血にまみれている以上は、空白に血文字を書くこともできない……。それならば、こうやって表現する他に方法がなかったのだね」

吉野葛は愉快な顔をして断言しました。

「でも、刺されて倒れたのであれば、そこから自力で両脚をこうして折り曲げるのは難しくないかしら」

二年の羽咲七海は、本作のヒロインらしく、可憐に言いました。

「難しくないさ。渡邊瑠奈は小学生の頃から体操をやっている。一旦、寝た体勢から両脚で踏ん張れば……」

こうなると鍋島犯人説はいよいよ濃厚です。わたしもまた、吉野葛探偵の言葉を聞いて、ほっとしました。鍋島はまだ否認を続けておりましたが、自分が犯人だと周

囲に思われていることに次第に抵抗力を失い、項垂れてきている様子でした。

「それならば早く、麓の警察署に行って、自分の身の潔白を証明させてくれ。ここでお前たちのリンチを受けるのは勘弁だ」

探偵役の吉野葛も、これでもう大丈夫だと思ったでしょう。にやりと笑って、縄で鍋島を縛り上げると、麓の町まで連行しようということになりました。皆、すぐに荷物をまとめて、警察署へと向かうべく、あのロープの吊り橋へと向かったのです。何も知らずに……。

わたしだけは後から行くからと言って、ひとり湖月荘に残っていました。

（馬鹿に静かだ……）

その時、ロープの吊り橋が切れて、みんな谷底に落ちてしまったようでした。

「おやおや、まさか、みんな死んでしまうとは……」

わたしは笑いました。

さあ、ここで楽しい種明かしをしましょう。

渡邊瑠奈の死亡時の体勢の秘密を申しますと、彼女は直前にストレッチの『ブリッジ』をしていたのです。あれはブリッジが、崩れた格好だったのです。そして洗面台の棚の中にあるはずの『鍋の蓋』を取ったことについては、これも簡単に『わたなべるな』の名前から『なべ』の二文字を『取る』という暗示です。すると、残る言葉は『わたるな』となり、ふたつの言葉を合わせると『ブリッジ、渡るな』というメッセージになるというものでした。橋を渡るな……。

渡邊瑠奈は断末魔に、犯人の名前を指摘したかったのではなくありません。みんなに命の危険を知らせるダイイング・メッセージを遺したかったのです。

それでは何故、わたしだけ生き残ることができたのだろうかと思議に思われるでしょう。

タネを明かせば、単純なことです。

あの吊り橋のロープにナイフで切れ目を入れたのは、他ならぬこのわたしだったのです。

それに気付いた渡邊瑠奈を、包丁で刺して口封じしたのもやはりこのわたしだったのです。

わたしが台所から出てゆくと、彼女は出血しながらも、全力で手近なところの棚の戸を開けて、鍋の蓋を引っ掴んで、その上でブリッジをしました。そして血を噴

き出し、ブリッジの格好は崩れて、呆気なく死んでしまったというわけでした。

ダイイング・メッセージというのは残すのが大変なのです。その意図は分かりましたが、わたしは放っておきました。探偵気取りたちに勘違いが起るのを一瞥見たかったのです。結果は、もともと悲惨なものになりましたね。

そもそも、わたしは生粋のミステリアンであるため、この山荘を酔狂でクローズド・サークルにしようと思っただけなのですが、吊り橋のロープをナイフで傷つけているところを渡邊瑠奈が目撃して騒ぎ出したのがいけなかったのです。彼女は本当にわたしがなにやら殺人事件を起こそうと思っているのだと勘違いをして喚いていました。人を呼びに行こうとしていたのです。冗談の通じない子は困ったもので、黙らせるには包丁で刺し殺す他、なかったのですよね……。

今、この山荘はガランとして静かです。『そして誰もいなくなった』のではなく『そしてわたしだけ残ってしまった』というわけですね。こんなブラックジョークを言っても笑ってくれる人はひとりもいません。みんな死んでしまったわけですから……。なかなか救助隊も来ない……。やれやれ……。いつまでこのわたしを待たせる気だろうか……。それまで冷蔵庫の中の食料がもつといいけれど……。

〈了〉



お読みいただきありがとうございます。「新生ミステリ研究会」所属のKanです。名探偵羽黒祐介シリーズの「赤沼家の殺人」「カルマ・マンダラの殺人」「妄想殺人事件」というミステリ小説を販売しています。